

平成4年度病害虫防除基準（水稲）の主な新規採用農薬とその使用法

（農試 環境部）

1. 背景とねらい

病害虫防除において、最近の栽培法の多様化、病害虫の発生動向の変化などから、これらに対応した的確な防除法の開発とその実用化が望まれている。

新規登録農薬等について検討した結果、本県の水稲病害虫発生様相、防除効果、及び安全性の面からも適用性が高いと考えられる薬剤を防除基準に採用したので、薬剤の特性、使用法について解説して、指導上の参考に供する。

2. 技術の内容（薬剤の特徴と使用法）

（1）フェリムゾン・フサライド剤 商品名：ブラシン粉剤DL、同水和剤

人畜毒性：普通物 魚毒性：A類

いもち病菌治療効果が高く、ごま葉枯病及び紅変米にも有効なフェリムゾンと、いもち病菌の予防効果の高いフサライドの混合によって、いもち病に対する散布適期幅が広い。主な使用時期は、葉いもちの急増期、穂いもち及びごま葉枯病を対象に出穂直前、または穂揃期。ただし、使用回数は2回以内に制限されていることから、計画的な使用に努める。

（2）トリシクラゾール（8%ゾル）剤 商品名：ビームエイトゾル

人畜毒性：普通物 毒性：A類

蚤毒性：ビーム水和剤30倍30/10a 5～7日（参考）

いもち病の予防・治療効果が高い、空中散布用薬剤である。稲体への浸透が早く、耐雨性、残効性もある。従来からある20%製剤は、人畜毒性が劇物に指定されていたが、本製剤は普通物である。防除効果は20%製剤とほぼ同等であるが、効果がやや劣る試験例もみられる。データが少なく残効性についての評価は、まだ確定できないが、一般的には、ビームゾル以外の空中散布剤と同様に、ほぼ1週間の間隔で散布計画を立てることが望ましい。

作用特性から使用時期としては、葉いもち発生盛期～出穂直前が適している。

（3）エチルチオメトン・チオシクラム粒剤 商品名：エカマート粒剤

人畜毒性：劇物 魚毒性：Bs類

、チオシクラムはカルタップ（パダン）類似化合物で、カーバメート系殺虫剤抵抗性の発現したイネドロオイムシに対しても効果が高い。また、エチルチオメトンとの混合により、その他の初期害虫にも同時防除効果が期待できる。イネミズゾウムシに対しては、80～100g/箱で害虫登録があり、50g/箱でも幼虫密度抑制効果が認められる。

使用時期は移植直前、育苗箱に均一に処理する。

3. 指導上の留意事項

（1）フェリムゾン・フサライド剤は、粉剤と水和剤では使用時期の制限が異なるので、注意する。

（2）エチルチオメトン・チオシクラム粒剤は移植後の気象条件や軟弱苗を用いた場合、葉先褐変や褐点症状の薬害を生じることがあるので、育苗箱施用上の注意事項を厳守する。

表-1 薬剤の使用基準（防除基準採用分）

薬剤名	商品名	適用病虫害	10a当り 使用量, 希釈倍数	使用時期	総使用回数	使用方法
フェリマソン・フサイト' 剤	ブラシ' 粉剤DL	いもち病 ごま葉枯病 穂枯れ	3~4kg	収穫21日 前まで	本剤及びフェリマソンを含む農薬の 総使用回数 2回以内	散布
	ブラシ' 水和剤	いもち病 ごま葉枯病	1,000倍	出穂期ま で		
トリクラゾール剤 (8%ゾル 剤)	ビ'-AIトゾ'ル	いもち病	原液 150~200ml	収穫21日 前まで	本剤及びトリクラゾールを含む農薬の 総使用回数 4回以内(本田 期3回以内)	空中 散布
イカルチオメトン・チオシクラム剤	イカマ'ト粒剤	イト'ロイムシ (イモス'ツ'ウム シ・ハダ'リ'カ I類)*	50g/箱	移植直前	本剤及びイカルチオメトンを含む農薬の 総使用回数 2回以内	育苗 箱用

* ()内の害虫については登録の範囲外だが、同時防除効果が期待できる。

4. 試験成績の概要

表-2 フェリマソン・フサイト' 剤(ブラシ')の葉いもち病に対する防除効果(平成元年)

供試薬剤 (区名)	散布時期		5株当り病斑数				防除価	
	月/日	☆後日数	7/14	7/18	7/22	8/2	7/22	8/2
ブラシ' 粉剤DL	7/14	+1	9.0	18.5	32.5	14.0	98	91
	7/16	+3	5.0	8.0	25.0	3.5	98	100
	7/18	+5	10.5	11.0	40.0	2.5	95	100
カスラ' サイト' 粉剤DL	7/14	+1	14.5	11.5	31.5	17.0	95	77
	7/16	+3	9.0	14.0	31.5	11.0	85	84
	7/18	+5	11.0	11.5	52.0	11.5	74	70
無処理	-	-	12.5	25.5	81.0	42.0	-	-

7/14~7/22はn~n-2葉位とn-3葉位以下葉の活性病斑, 不活性病斑の合計。8/2はn~n-2葉位葉のみの病斑数。

* いもち病感染好適条件日(☆)出現後日数。7/13, 7/17に準好適条件が出現した。

表-3 トリクラゾール(8%ゾル)剤(ビ'-AIト)の航空防除による穂いもち防除効果(H3, 東山町)

供試薬剤	使用量	処理日	9/6穂イ'チ 発病穂率	備考
ビ'-AIトゾ'ル	1.50/ha	8月1日	5.7%	5圃場平均
''	2.00/ha	''	14.7	''
ビ'-AIゾ'ル	1.20/ha	''	9.8	10圃場平均

注) 全区とも8/14, 22の2回カスラ' サイト', フサイト' 慣行防除実施。葉いもち発生程度の圃場間差が大きく、穂いもち発病率も圃場によるばらつきが大きかった。

表-4 イカルチオメトン・チオシクラム粒剤(イカマ'ト)のイト'ロイムシ防除効果(H3, 雫石町)

供試薬剤	使用量	食害葉率
イカマ'ト粒剤	50g/箱	0.5%
チオシクラム粒剤	50g/箱	1.5
無処理	-	4.4

注) 5/12移植。被害調査は7/4実施。